

なつたんやて直ぐに宿替へして來ると言ふて歸つたよつて、今日にも宿替へ仕て來よる」そんなら何うなるのや」何うなるて、去にしなに、えらい事を吐してたで、家賃を先家賃に仕てもろて呉れ、一つでも、若し家賃が滞うツたら、家へ石油をかけて火を點けると言ふたが、アリヤ、やりかねん、あの男は」「へエー さうすると源さん、何ないにするのや」「何ないて、俺やとて悪氣で、仕た事やなし、長屋のためを、思ふて仕たのやよつて、仕方がない、長家中で集めて、彼奴の家賃を遣らうぢやないか」「源さん、お前の考へ、あんまり宜うないで、彼奴の家賃は長屋中から出すとしても、家が塞ががつたら家主へも家賃を持つて行かんらん、是れは何うするのや」「仕方がない、皆から出してもらふ」「源さん、私、いやで、我が家の家賃さへ心配を仕て居るのに、他處の分まで、おまけに二ツも、よう出さん、勘忍してんか」「まあ、仕方がない、こう仕やう、彼奴やもめと言ふてよつたさかいに、宿替へをして來たら、長屋から、替りくゝに、おかすをば、辛う煮いて遣るのや、やもめが、お菜をもらふたら、嬉しいので、無暗に喰いよると、のどが乾く、そうすると湯水を飲む日暮れから、子供の有る内は、子供をギヤアくゝと、泣かすのや、手の空いた内は、鐘を、チンくゝチンとならず、念佛をあげる、なんや陰氣な晩やなアと思ふ、ひる湯水を飲んで居る、こんな時は、かならず、便所へ行きとなる、氣持が悪いと思ひながら、便所へ行く、長家の便所が三ツ有る、兩方の便所の戸を、釘で打つて、開かぬようにして置くのや、戸を開けよとするが開かん、誰ぞ這入つ

て居るのかと思ひ、片方へ來る、これも開かぬで、まん中へ這入ると、徳さんの毛だらけの手で彼奴の尻を、なせて見イ、たいがい吃驚して、逃げ出すで」「オイ ウダくゝ言ひないなア」長屋は、ゴテくゝ言ふて居り舛、スルト右の男、俥に荷物を積込んで、宿替へをして來ましたが、猫の子一疋出ません、「化物も俺の勢いに、おそれて、よう出ぬわい、えゝそんな化物の出る筈がない」、ものゝ五六日も経ちました、或日の事で日が暮れて、仕事から歸つて來たが、まだチト早い、ランプの火をつけて、七輪へ火を起こして、鐵瓶を掛けて、上り口へ出して置いて、手拭を提げて風呂へ行きました、表の戸が五六寸開いて居り舛、この留守中にやつて來ましたのが、右の男の友達二人連れ、片手に一升徳利を提げて「オイ早うおいで、彌太しう、うまい事をやりよつたなア、化物も何も出やへんねがな、長屋の賢こがりがあつて、化物が出るとか、なんとか言ふたのや」「そうやてなあ、彌太しう内に居るか知らん、この長屋と思ふが……：「そうや、こゝらしい……：、オイ彌太しう……：、オヤどしうしやがつたんやろウ、留守らしいぞ」「構やへん 這入れ……：、ハテナ 風呂へでも行きよつたらしい、オ、くゝ上り口へ火を起して、鐵瓶を掛けたまゝで出て行きやがつた、これやから、ヤモメに家を貸すのは家主がイヤがる、ガンくゝ火を起して……：これが一ツパチツと飛んだら、たちまち火事やがな、オイ お前その火を、半分ほど取つて火鉢へ入れてんか、鐵瓶の湯がヨウ沸いて居るで、いづれ後から飲む酒や、斯うして祝ひに持つて來た酒、彌太しうが歸るまで體屈やで、二人で飲んで待